

73 標識マイクロスフェアによる脳循環動態の検索 - ^{133}Xe -rCBF functional image との比較

中村雅一, 恵谷秀紀, 津田能康, 井坂吉成,
浅井 勉, 米田正太郎, 中村幸夫, 大森英史,
久住佳三, 木村和文 (阪大中放, 阪大一内)

標識人血清アルブミンマイクロスフェア (HAM) は臓器血流分布の評価に利用されており, これの頸動脈内注入により脳血流分布の評価が可能である。我々は本法を用いて脳血管障害例の脳血流動態の検索を発表してきた。今回, 本法の臨床的有用性を検討するため, ^{133}Xe 動注法による rCBF-functional image (rCBF•FI) と対比検討したので報告する。対象は内頸動脈系脳梗塞症と診断した37例である。一側の内頸動脈より ^{133}Xe 溶解生食水を3 mCi 注入し, ^{133}Xe 脳 clearance curve をガンマカメラで計測したのち, ^{99m}Tc •HAM 5 mCi (径 15 ミクロン, 80000 個) を同様の方法で注入し, HAM 脳シンチグラムを記録した。この後オンラインミニコンピュータシステムを用い, イニシャルスロープ法による rCBF•FI を作成し, 比較検討した。HAM 脳シンチ上, 種々の程度に描出された低血流領域は, rCBF•FI でも低血流領域として観察され, 両者のおおむね良好な一致する所見が得られた。

75 PET用tracerとしての ^{13}N -NH₃の問題点

加藤宏之, 大友 仁, 泉山昌洋, 川島孝一郎
巣 武, 小暮久也 (東北大脳研脳神経内科)
井戸達雄, 岩田 錬 (東北大C.R.I.センター)

^{13}N -NH₃により得られる脳イメージングは、次の3つの factor が混在している画像である。それは①局所脳血流量 (rCBF), ② ^{13}N -NH₃の small glutamate pool への移行による ^{13}N -glutamineへの変化, ③組織 pH₀である。そこで、従来PET用tracerとして用いられている ^{13}N -NH₃について循環動態の機能検査としての有用性を中心に検討を行った。実験は拡散により脳内に取り込まれ、その分布が局所循環動態を示す iodo-antipyrine (IAP) を用い、正常及び片側虚血スナネズミの同一固体に ^{13}N -NH₃ と ^{14}C -IAP を同時に投与する二重標識化合物オートラジオグラフィー (ARG) を行い、両者間の相違を観察した。その結果 ARGにおける ^{13}N -NH₃ の注入後の時間経過によるイメージングと各々に同時投与している ^{14}C -IAP のイメージングで明らかな相違を認めた。これは PETによる ^{13}N -NH₃ イメージングは局所循環動態を正確に反映しているものとは言えないことを示唆している。以上のことより ^{13}N -NH₃は他の可変要素のコントロールおよび評価ができない実験系では、PET用tracerとしてその適性を欠いていると思われる。

74 Kr-81m選択的脳血管内持続注入法による

SPECT

比嘉敏明、棚田修二、石井 靖、藤田 透、
鳥塚克爾 (京大、放・核)
滝 和郎、米川泰弘、半田 雄 (同、脳外)
福山秀直、亀山正邦 (同、神内)

各種脳疾患における局所脳血流分布像の局所解剖に基づく検討を行うため、コンピュータ付回転型ガンマカメラと X線CT装置とを組合せた検査法を考案し、その基礎的・臨床的検討を試みた。

選択的に頸動脈または椎骨動脈に Kr-81m (半減期13秒) を持続注入し、局所脳血流像横断断層シンチグラフィー (SPECT) を得た。X線CT (XCT) と SPECTとの比較検討のため、XCT上で脳とその病変の画像輪郭抽出を行い、対応するセクション・レベルで SPECTと重ね合わせた。

Kr-81m SPECTとXCTとの重複画像により、検査したすべての症例 (21例) の小脳天幕の上下で、主要脳血管の局所脳血流分布が明瞭に表示できた。また大脳基底核・視床、および前・中・後大脳動脈の境界領域の局所脳血流分布の評価が可能となった。局所解剖学に基づき、脳全体あるいは各主要脳血管毎に血流分布を知り得る点が本法の特徴である。

76 モヤモヤ病における N-13-NH_3 を用いたポジトロンCT

田町誓一, 高島常夫, 山浦 晶 (千葉大・脳外)
宍戸文男, 館野之男, 山崎統四郎, 入江俊章, 井上 修, 中山 隆, 鈴木和年, 玉手和彦 (放医研)
池平博夫 (山梨医大 放)

5例のモヤモヤ病患者に N-13-NH_3 及び C-11-CO を用いたポジトロンCTを施行し、脳循環動態の評価を行った。これにより神経症状や従来の検査方法と比較し、手術的治療法の効果判定についても検討を行ったので報告をする。

症例は小児例3例、成人例2例のモヤモヤ病患者で、各1例ずつに Encephalomyo synangiosis を行っている。ポジトロンCT所見は、症状の多様性と程度により各症例で異なり、神経症状の責任病巣に一致して N-13 の集積低下を表わした。手術例では症状の改善を認めた成人例は N-13 の集積は良好で、症状の改善されなかった小児例では N-13 の集積は著明な低下を示していた。 NH_3 の病的脳での挙動については不明な点も多いが、モヤモヤ病等の中枢神経疾患において、その三次元イメージングは病巣のひろがり、治療効果の判定に有効であると考える。